



門 3  
號 3496  
卷 5

東海道名所圖會卷之五

目錄



吉原

鳥氏筆集  
前郭文集  
為村卿行  
富士鳴屋

元吉原

原

師齒迫山

井出館舊趾

足柄関

富士人穴

沼津

富士山

竹取物語  
朝鮮人詩稿  
琉球人詩稿  
朝鮮牧村園

田子浦

手児呼阪

白隠禪師蹟

興國寺古城

竹下道

足柄神祠

八重山

車返

河津古蹟

勅書  
伊勢物語  
更利古語  
曾我夜討画

富士沼

要石

阿野禪師古跡

横走関

新羅三郎秘曲傳授

丸子神祠

富士隠

都良香富士記

羅山楚六  
六山辰記  
神夜辰行

左不二

芝瀬川

阿野細江

愛鷹山

千本松原

龜鶴墳



早稲田大学図書館  
新 35.1.28 購  
藏 書



黄瀬川

千貫樋

那宮八社

神樂池

興小島

風越臺

藥師堂

箱根温泉

曾我兄弟墳虎墳

底倉湯

湯本湯

早雲寺

豐太郎陣所

宗祇終焉地

駿豆兩國堺

鳥居

走湯山

富士見平

箱根

親鸞聖人堂

蘆之湯

宮下湯

温泉記

石橋山

曾我里

小田原

頼朝義経初對面陣所

三嶋

鳥居

熱海温泉

山中古城

管根湖水

小地獄

堂寫湯

湯本名品挽物店圍

早溪

浄泰寺

小田原北條

酒匂川

藤卷寺

日蔭馬場

鳴立瀨

三社權現

馬入川

鎮不動

眞院石尊社

小餘綾儀

鹿松

小餘綾社

花水橋

十間阪

白重

新鐘

曾我里

吾妻山

切通地藏

大儀

平塚

大山寺

神樂

川勾神社

相模國府

鳴立瀨

虎子石

八幡官

前不動

大山寺









天徳の  
 大い  
 園中  
 伴る

富士山  
 扶桑第一山  
 重此對孺顔  
 白雲初陽吐  
 峻嶒霄漢間  
 蕉中帶







源順竹取巻  
 寶篋園記  
 書けしとて神の  
 道いさ竹の  
 眼は類者肌乃  
 繁人多れは後宮  
 入内しを  
 去る月若菜  
 若うふらふ  
 ち命いさ  
 高木  
 されを  
 たり王  
 奏と  
 又咸正二年八月十五日記を  
 け蘇  
 け蘇

石田友行画



竹取巻  
 蘇  
 蘇











顯池生富士山圖

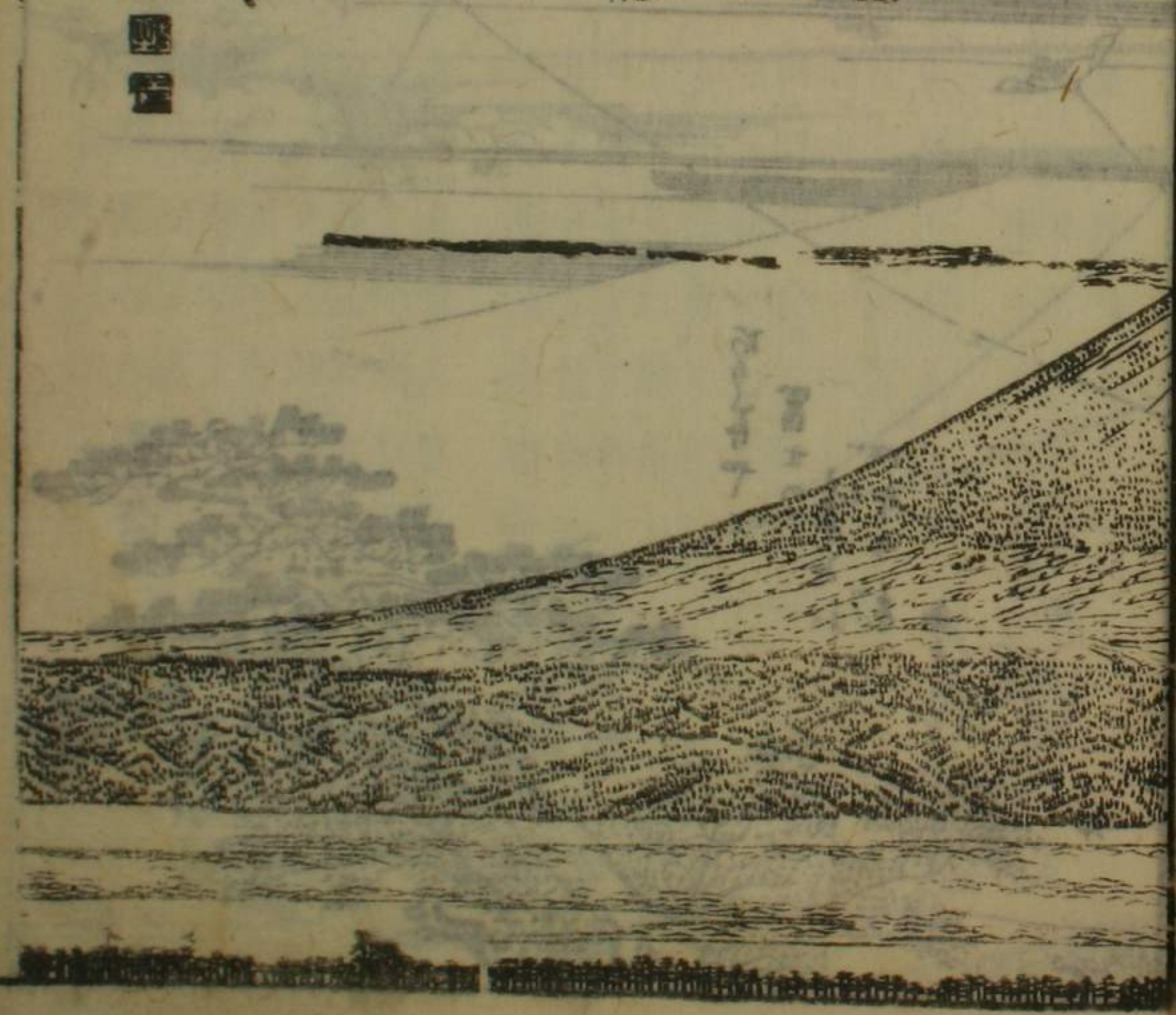
實之也下能名曉繪  
稍露而看峰影分  
科克能開天半色  
始知千里一勞君

大典禪師



寫其可  
此山自昔名之  
血此山四旁觀不  
公家不致求分  
亦在傳人分可  
亦病子古金  
實地之

實政丙辰秋九月過駿河  
吉原驛望芙蓉景 張在正原









後周齊州開元寺講俱舍論賜紫  
 明教大師進釋氏六帖義楚集  
 日本國亦名倭國東海中人時徐福將五百童  
 男五百餘里止此國也今人物如長安中畧  
 東北十餘里有山名富士亦名蓬萊其山峻  
 面是海一采上聳頂有火煙日中蓬萊諸寶流  
 下夜即却上常聞音樂徐福止此謂蓬萊至  
 子孫皆曰秦氏彼國古今無人侵奪者龍神報  
 法不殺一人為過者配在犯島其靈境名山  
 不殺一人為過者配在犯島其靈境名山  
 史記卷之百一十八淮南王安傳  
 昔秦絕先王之正道又使徐福入海求神異  
 物還為偽辭曰臣見海中大神言曰蓬萊神  
 使邪臣荅曰然汝何求曰願請延年益壽藥  
 曰蓬萊山見芝成宮闕有使者銅色龍形光  
 至蓬萊山見芝成宮闕有使者銅色龍形光  
 照天於山見芝成宮闕有使者銅色龍形光  
 令名男子振振男女與百人之事即得之矣秦皇  
 帝大詭遣振振男女與百人之事即得之矣秦皇  
 而行徐福得平原廣澤止王不來  
 而筆乘曰倭國東北數千里有山名富士又名  
 日本國名倭國東北數千里有山名富士又名  
 蓬萊國中最高山三面皆海一采直上頂有火  
 烟秦時徐福入海求藥終止此至今子孫補秦

竹取物語登天段

かゝる非の事も知らぬわが子孫の御心と見えたり  
 此も何れもかゝる事も知らぬわが子孫の御心と見えたり  
 後世の事も知らぬわが子孫の御心と見えたり  
 ては是れもかゝる事も知らぬわが子孫の御心と見えたり  
 しやうと云はぬ國も生れぬと云はぬはなはたけを  
 ことし後世の事も知らぬわが子孫の御心と見えたり  
 後一月の事も知らぬわが子孫の御心と見えたり  
 事りぬことあらはれぬ書や天人の中ふもむすむ相あり  
 夜いより事も知らぬわが子孫の御心と見えたり  
 事れも知らぬわが子孫の御心と見えたり  
 てより事も知らぬわが子孫の御心と見えたり  
 事れも知らぬわが子孫の御心と見えたり



よの時のを娘志とて...  
りよの「こせひ」といふ...  
一やを...  
か...  
や...  
は...  
わ...  
お...  
と...  
天...  
は...

人と物思ひの...  
其のら...  
さ...  
ふ...  
い...  
る...  
こ...  
お...  
小...  
半...  
あ...  
の...



月の岩盤せり人々と交りてするが國はわが山ありてを  
はくさきよしは海ありてをさききりてを海人新  
不死のく考理のはがねと火とほけてをさききりてを海人  
所のよしけたぬらて兵者もあるとくく山のゆりなるを  
あふ其山はゆりの山と名はけあるとありいまは雲の中  
あらのほれと所いほくゆめ

此物語を源順の作あり詞曲をてん代り世は賞事久し按  
富士と兵士と富士と書り又不死の山は焼く山と云ふ  
藤山嶽 鳴澤高根 常盤山 塵山 三十三山 三重山 新山 見出山  
三上山 神路山

富士の山これ五月のほくらに雪はまをぬくぬれり  
新古今業平朝臣  
昨しるぬ山を富士の子や川とそかのゆりてに雪のゆり人  
其ふはまなたはたえのゆりてをりかまらげぬ人けり  
てかりいま月とりのゆりにぬ人有多

塩尻の伊勢物語七箇の秘談の其二篇請七箇とをわと物の介。月やゆりの  
のすあさ川。名はと都鳥。あゆのさその幸。行なふの介等なり

丙辰紀行

高山出衆峯巔炎裡雪氷雲上烟  
大古若同仁者樂蓬萊何必覓神山  
羅山

何物芙蓉落日寒關中霽迥綵雲端  
青天一柱嶺巖出白雲千秋突兀看  
但徠

誰指仙衣懸縹緲自疑玉女剖琅玕  
于今石跡山陰地喚取驪駒問大丹  
全

落日秋寒海上峰危樓西顧眺芙蓉  
浮雲不隔瑤臺色雪下珠簾十二重  
萬卷

芙蓉峯  
大海天北盡連天芙蓉出芙蓉白雪  
金華

光更銜海上日芙蓉出芙蓉白雪  
尚南

巴馬鞍州道中逢故人  
己在范叔袍袍空蓮嶽雲猶闕萍洲途  
賦富士贈熊其山  
堪芙蓉獨立臥清虛始信大東天帝居  
秋月

朝鮮國文學





鳥居

乃をかく

深し

つらうた

さう

あつ

夜明け

ふあての

きり

あつ

あつ

あつ

海

中

文







間々ばに曙くすゆ 春あつらん人あつと物まは御旅宿ら  
以八新せれおれとまきに夕ふたやとをせつんと所定有はるは  
富士の御當座あすくく御詠 二條 左相府

あけほめく春あえとむるゆのまはりれえん人のてのこえん  
御らぬや山口あつてみかあつて  
毎見士一峯懸口 辨九 天霞霽仰々 弥高  
莊周曾曰泰山北一ケ比倫秋兔毫

東紀行

帝期崑崙雪置之扶桑東  
突兀五千仞芙蓉秀碧空  
八重かたもたもたてゆの山あはれよせおれとてとて  
ふたより高根かけと晴る日に山をるてむる事の時  
ふたより高根かけと晴る日に山をるてむる事の時

嶽色遙浮遠客航擬從高處振衣裳  
環形屹雄天地積氣常寒擁雪霜  
瑞靄清龍池上竹灑光低襲海中泉  
詩篇恰有愚公力移得異顏入彩囊  
韻贈鳥云云  
次日本隨月

え日の見ゆる物みせん婦一乃中  
富士の山歩をくもかたすくこう和  
富士みせくく三月七日八日の非  
目みかろの時やまきく五月不二

三帆舟を後尾み形るわはみ外  
富士の姿い日ありく高し槐乃を  
百富士やせもえ日乃にめより  
あけき日冬室小あれぬ婦一の是  
四萬八千丈富士もさく乃るみみ

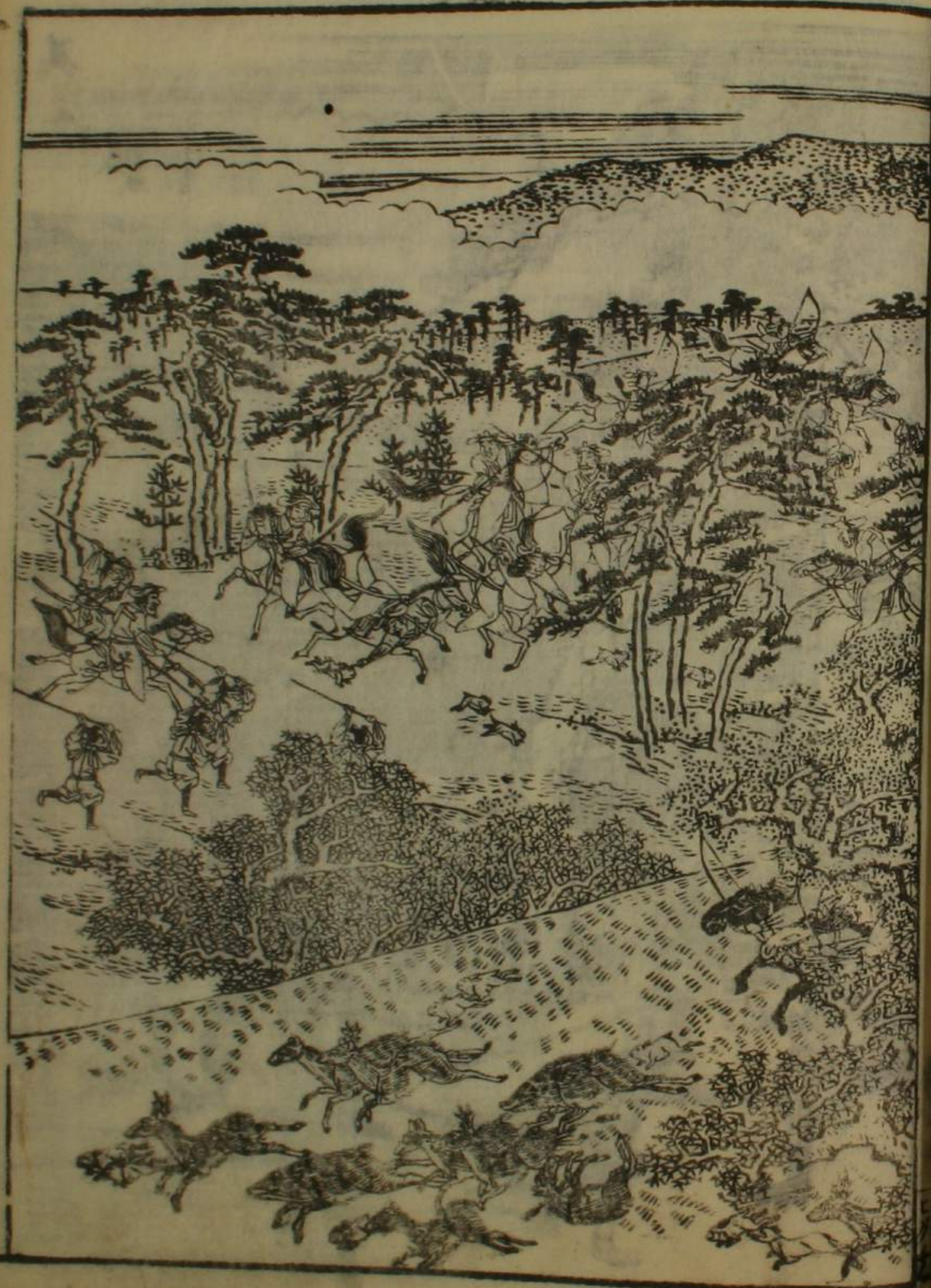
宗鑑 嗣春 信徳 其角 小代 舊圃 住業 藤島

珠録 秋正山 續谷山









其二  
不二の  
牧

清和二年  
作





其二

曾成  
兄弟  
叔討

清盛



先富士の芙蓉と號する幸八の峯八の谷ありて其體八葉の蓮華  
小似り不二と都氏の宣人郡の名ありてゆるやを産して其花  
生じたる謂ふ藤を駿甲祖の二國小跨りて巔を十五州の壯觀にて  
青天忽見素羅笠羅笠擔中十五州と惺窩先生も吟めひ又石  
川丈守雪如執素煙如柄白扇倒懸東海天と賦し京師乃四明大  
和の金家より見ゆる尚も肥の崎陽より百里をうづ漕かざる得り  
富士峯見ゆ外夷乃航我邦渡海の的とせやとて聞ひり  
孝安帝九十二年は山初と現むも又孝靈帝五年辺州琵琶  
湖と俱み一夜に現すもいひ傳う或説く大々といふ山雲霧際  
くといまに現むに人氏もさくといふねむる事なり孝靈の御  
崎初と号くれ見顯くくも我れ死も都氏の記ふ人ご  
れ正説ふに本朝の高嶺として絶頂まで九里餘直立の  
高さを積む六都て二千五百丈ありて山斗小道一孝の貌妙して業平も  
塩尻小似りやひ夏天小雲を載く萬葉小詠に山巔は平原あり  
其中と鳴沢とそ凹みて甌の如く底は池あり今と水涸ては虎  
石とて虎の蹲た似る石ありてそを衣法小旭が耀し是れ三尊佛  
が拜すやか邈小東北に見下せば海面幽して島嶼波小卧に鷗の足  
西南に只雲霧朦朧として水々空と見えりは山路のこの街ありて  
まよよりせりも筋小分る裾野を長りて百里小はる尾の富士見  
原達の汐見坂までふの形相同ト三穂法見神原よりと良小當り  
たり原より原と正面して裾野まで解りて山趾東を小長し三嶋  
箱根より伏籠の貌小人々鎌倉よりと小の方甚延りて武藏野  
よりと西南小なりて江府の赤坂駿河巻よりと便興乃窓小畔と動  
日本兩國の橋上と馬上の人乃首とあぐり駿河町の名も富士小寄り  
延喜式内法間神社とけい乃神なりて本花間耶麻と名は命とふは  
乃御女とて環々林の皇妃本花と櫻樹小夫浮りてふりて富士小櫻











後

乃ち其思ひも下や水くんゆ乃ち思ふ心や入り

海部

新拾遺

さみろ婦乃ち思ふ水越くまや烟くまゆく人飛ん

巻圖

主本

飛ゆる心ひをうし思ふ心や思ふ心や思ふ心

推想

同

紅葉ちるやの思ふ風越く思見り関小路ありあ

後撰

無名抄

五條三位入道は乃の長者と名をたれや下の思ふとゆの

後成

同

形こころみくあゆみの入道とく思ふれあひくまき道乃

遺恨

同

遺恨やく思ふゆあれ思ふの本まうあぬはあしとこひ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り

同

乃りゆの思ふ思ふ思ふ

乃り



田子浦  
 毛水兼天碧  
 去愁散空遠  
 房浦舟窗  
 窗中人象  
 過五洲  
 峴者危  
 林蒼滿  
 汎覽不  
 遠客可  
 石身隱  
 西延首  
 盈掬憑  
 寄恨東流

借六如



鳴呼  
 多富士  
 舞也の生肌  
 田子浦  
 廿七

本正











芝瀨川

凡土記小抄より土人云猪頭村より流るる下流ハ富士川小會凡  
和行りとせ之川と詠れ凡川筋より水苔成生た遊瀬芝川

ま本

夏も終るけの小乃月さえあまほりぬ

法眼源全

ま本

高根より流るる流るる月小抄より婦人乃芝川

源氏真

原

妻ハ海原なり小富士沼南ハ大洋曼外より其中の曠原ぬれハ  
右あり原台原離原され凡之原より入沼津とてき里半  
折新撰

風雅

折新撰

吹草り凡の高根乃朝凡小袖志ほれ々

松葉法言

ま本

白妙のや乃さ秋小月寒て歩凡志々

海道長智言

ま本

あひくの道めく凡むり

安門没羅

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

白隠禪師蹟

源の驛鶴林山松蔭寺といハ禪宗傳家氏僧と當野中  
長澤氏のふりて蔵智聰明の寺あり十九卷の時ハ蔭

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

ま本

あひくの道めく凡むり

同

山婦携籃多菜色村童榆箒折疎籬

白隠智



深山佛法 後叫舊巢受風宿鶴鳴  
獨頌 烟靄輕浮補岸關藤蔓倒掛引薪行  
活埋自性 葛藤窟刺殺已靈 荊棘林  
青菜黃菌 白蘿薑紅爐 猶泣止啼金  
善夢裏明今問著底是斷乎不常乎又示偈  
善星纒明今問著底是斷乎不常乎又示偈  
善星纒明今問著底是斷乎不常乎又示偈

駿州原驛 劫陰寺 妙禪師 白隱 畧行狀  
諱惠鶴 號白隱 州原驛 人也 俗姓長澤氏  
一貞 母年臘月廿五日 報忽發求法 願十  
歲辭父母 出家 因松蔭寺 元文五年 參學之徒 數百  
歲承公 遂住 松蔭寺 元文五年 參學之徒 數百  
虛堂錄 妙機 英發 名經 錄者 凡五十年 春就本院  
後應方 法無 請講 評錄 者凡五十年 春就本院  
侯延師 聽法 無徒 以千數 烏五年 戊子冬 惟疾  
提唱大 應錄 參徒 以千數 烏五年 戊子冬 惟疾  
端然而 寂實 十二月 十一日 荊叢 嗣其法者 龍澤  
遺路於 寺冥 隅扁 塔日 荊叢 嗣其法者 龍澤

師齒迫山 萬葉 師齒迫山 齋而離間  
天記 嶺延慈 松蔭 遂元 蘆也 所著 槐安 國語 遠羅  
金等 耕錄 普說 荊叢 毒藥 及國 字法 語遠 羅  
明和 六年 六月 行八 日世 毒藥 及國 字法 語遠 羅  
救謚 神機 獨妙 禪師

興國寺古城 原の東今は村のたのり方なる藤山 乃の爲國大守今川氏の擲  
城之龜の以甲州の寇山梅雪の家臣 尉城守部より者ら  
度長六年 天守六春 利康景 拜領 死す 同十二年 三月 九日 天守 家人 同  
國原田村の郷人 論して 是れ 然れ 代官 井出 甚勘 聞れ 言 流し  
阿野 禪師 古蹟 足柄山の麓 井出里 といふ所 古の禪師 八右衛門 頼朝 御の書  
東鑑 云 建仁 三年 六月 於下野 國 誅 阿野 法橋 全成 云云  
井出村 人家 有り 阿野 禪師 の遺物 什寶 あり  
阿野 細江 阿野 井出村 あり 水原 足花 山より 派流 して 阿野 入 志 海小

阿野細江 阿野 井出村 あり 水原 足花 山より 派流 して 阿野 入 志 海小  
阿野 井出村 あり 水原 足花 山より 派流 して 阿野 入 志 海小  
阿野 井出村 あり 水原 足花 山より 派流 して 阿野 入 志 海小









前九條  
 三從  
 義光  
 巧吹笙  
 源公  
 妙曲再聞  
 土鳳鳴  
 左  
 熊尚之



藤英林

新羅...  
 源公...  
 妙曲...  
 土鳳鳴...  
 熊尚之...  
 義光...  
 巧吹笙...  
 源公...  
 妙曲再聞...  
 土鳳鳴...



雙鷹山

又蘆高或一足高或一足柄也書凡古本より名所集相換國といふ  
北條より富士小連の原野より近江よりあまの載る原より小の方  
三理ふより誅之延暦廿一年三月雲霧騰騰脚中本十餘里とて山  
出現せり故に双鷹山といふ山頂の形雁のや俗に雙鷹とて山  
と富士とのあまのむらりの東海に之を望み國より富士の麓に  
到るや又双鷹とて箱根山よりあまのむらり山同様に横を國正  
甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

甲州の北邊とてありて

足柄関

あけの山流の月ふそそ越てあけの袖小袖を結ばる  
あけの関の国流越りてあけの久ふしむかひむ厚徳がり  
あけの言ぬ関の戸さぬ頂が六月も越らんあけの山  
あけの神の喜ねふえり言伝分てとる足柄の関  
あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関  
あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

あけの言ぬ外ふ分捨てるとる足柄の関

足柄神祠

神主仲津氏  
神社考云足柄明神昔赴唐其妻神獨留守三歳明神歸  
朝妻神色白肥美明神曰思慕之情待歸之心必可瘦  
襄今何肥而麗哉不思我也遂去妻神

富士人穴

建仁三年六月三日將軍賴家御駿河國富士の狩倉小針さゆの  
藤ふたの穴あり世の人には富士の人穴とて名付たるは穴の眞は見極  
めさせらんがなるそ仁田四郎忠常派名く重寶の御劍以珍は  
穴の中ふく眞は極ち来るその上意忠常畏く御劍以賜り御色を  
死うまてま徒人穴の内をふ多次の目己の刻忠常人穴の  
来るに置既小一日一夜派急より將軍御前小召て聞かば忠常申  
たすは洞甚狭くと踵はたかき奉叶ひかへし終ふま通下とて  
心のかく進むれど又其暗れ奉りたかき進み毎小社明は



燈一互小聲は合せて沢徑小路の間に水が流れて足が曇らぬ幅幾許と  
り人渡りく火の光小聲馬きく飛翔りぬに満ささる色里き物世  
帯は白に幅幅も赤少ぬに水の流小種さく小き蛇の足小りう 纏  
けく幸涼の刀が抜き切流し進むが小或は腥白い鼻が衝  
嘔噓せしむる付もあるか芳しれ熏未くく涼小形も本もあつ奥の  
漸々小廣くして上の方へ何やら色透過る青い氷柱のめくが  
物ぐしと見てうり即從の中小物小を得たるら申さるこゝに鍾乳を  
石薬之仙人是派取て不老長生の薬煉と傳聞しや語作又歩は足  
乃下儀小雷のこころく音して千んばり一同小陣は他へ申すは是  
定て修羅窟の音のるすとよゆしまふ存どて摘りされん  
暗く松明が燈續けお廣し所おあり四方へ黑暗幽々うて  
遠近小時々人の泣聲聞ゆ細れまど形か 迷途の旅路は  
向いたるうが竹ほどとるか所小川の大河おゆるま向へき蚊鳥

も足に張りける水音を其涼さ潮瀬も定ぬに逢ゆ水不足は  
浸し入るるまに其水の早れ幸矢の長く冷ゆる幸極寒の水下ゆり  
紅蓮大紅蓮の地獄の水は是形下川向ひ其遠さ七八十間しりし其中に  
松明のめく形も向ひ小見えく光さかぐ火の色中て光の中を  
奇異の市女うりぬらりてまの即從四人を其内倒れ死に  
忠孝の御靈は社拜する小神聲此小教をせり人所幸有て即下り  
給りし御鉢に其川小投を其神姿隠しよひ忠孝の命ぬ海り  
出へと申し頼家卿聞ふか其具を定く天地の外へ世界形に  
重て液し身は能せんぬさくはうりく見届くやや佐多り  
是先の人のながらは固ては穴は間太善菩薩の位祈へと申つて  
むりより逐小其中に見る幸能んれと傳人只今加藤小幸  
御もりの將軍家の御身ふりうて御慎を取らぬ恐  
くもせぬ諸々の





文貴房の...  
 申...  
 揚...  
 命...  
 今...  
 家...  
 羅...  
 漢...  
 向...  
 漢...  
 果...  
 の...  
 作...  
 道...



八重山

八重山のやうな山の数もあつたやうな山あり

万葉 上総國朝集使大塚大原真人今城向京之時餞之歌

多禮乎可俊美等弥都々志努波牟 都司妻等

新千 津守國量

名三 千守國量

九子神社

東向門村あり延喜式内社葦原神國奉立等以所の生村神八例奉

千本松原

宿禰の縣の西南五又田村の海岸の松原なり天正の以武田勝頼全滅の

先代所

六代所方の石塔あり神の村あり今も松原の松林は後徳川氏松原の松林なり

先代所

六代所方の石塔あり神の村あり今も松原の松林は後徳川氏松原の松林なり

先代所

六代所方の石塔あり神の村あり今も松原の松林は後徳川氏松原の松林なり

千本松原といふ海のおだちと遠くは松原かふ生りてなり此  
けりきり路一仲ふの松もひらひら木の本葉乃うを竹登り子  
足巻の千株の松乃下の雄孝守一葉の舟れ中乃萬里の身と  
傳ふるふれも是もいづれも眺望のいづくも勝なり  
見るとせはらむの松乃と息をききりふはくも海原 毛り

先代所 小松三位中將維盛御の君君六代所あり十二歳小成なりと傳ふ

六伯羅やう既小誦せんとする所小高雄文貴坊は自命延ばして源倉

小下宿取早廿日もしも何のゆはれも小糸時以六代所あり

て建治三年十二月十七日時雲井と餘小願てうたふ限の東流と遠坂乃

関打のうたは津の浦雲津と原もゆくと野くま山を名官々打のく

下りなり駿河國にも成りうたふ所の命々た限とて下り小本松原

しり小本松原は居ををえたりをえして布皮小まきり小糸自死

馬より死せり若君の所傍近く春つと申すたるうたは道と文貴

の聖とるひのい作とあれまを具りまて治時大山のあかさまの鎌倉

乃所の中も計強公の近に國やうまの春をたる故京建りん一葉の感

の御身形も推申共も叶りせのい作りてやられまはるる免角の

更半も及ひらば齋庭五齋藤六はて宣ひたる穴賢汝等都也



我道と斬れたりとどど其故は後入強あるゆへに  
は有様は聞かす歎悲の多き後世の障も成るる鎌倉まで運付  
て上るに下りし宣を二人の者共涙流くると流に良有て高藤五  
洞に押して申すは君の神も佛も成せぬの死後命生て再び  
一時脚懸の肩小舞うると涙少くも涙少くも涙少くも涙少くも  
の守護の武士共見奉せてお那最惜未済公の生にやとて皆  
遣の袖とぞ濡したる厥后乃天西向くも高藤小十念  
唱ふを流し頸延てせ侍れたる将也三藤二親後斬小掛れ  
る刀派引側めたの方より美奈の御後や廻り流小斬れしとる目も  
くれも清果てはけふ刀派打付もとも真にお後不覺小作化小侍  
られ下りたる刀派捨てて除ふるとはゆれ斬られきんと斬人小掛下  
小愛小墨隊の衣着たりたる傍人月毛の駒小打棄て鞭派打てと  
馳りたりたる其色の者も嗚呼最惜あの松原の中とせ小蔵さ君  
小條殿の只今斬るゆゆと斬の者共心しくと走集りたりは僧心之き  
小鞭派揚て招きたるが猶も覺れざる者方笠派脱て指上聲派揚て  
ぞ招きたる北條子細有とて待たぬ侍行形馳来り更馬より飛下  
りたるを法もる鎌倉殿の御教書是小有とそ是れ北條是成  
扱てる小蔵や小松三任中将維盛の子具六代所おるおんは然は高  
雄の聖文覺坊の誓は法は疑はぬは才預小條殿頼朝と降て所判  
あり小條押入し三邊讀て神妙とそく指上れは齊友五會五示  
乃小條家の即等共もか返ひの涙派流りたる其より美奈文覺坊預  
りたり齊友五會五示とそく  
平家物語世門をうん頼朝と亮一は徳文覺坊  
六代所おる秘傳はとそく美奈の法堂と殿とそく  
源倉小條より討たぬは又文覺と五州一庭刑一六代所おるはとそく  
事りぬふとそく美奈の誓は又四郎頼朝の誓は物指しと相田田川京とそく  
後と斬れぬとそく今も田川川の中より六代所おるの誓は  
本鎌倉志しとそく美奈の誓は鎌倉の部下とそく  
是非分明  
取しは





小所紅松金佐の匂いとゆるゆる  
 髪はほくそこの  
 ひもくしたこの  
 顔の練瓜の皮の  
 わりく旅客を  
 とりていふ  
 旅の處さかこ  
 おきていふ  
 かこひし  
 りさし  
 猛小毛  
 生ておせ  
 しや



香丸  
 何と云ふ衣をさす  
 りかぬかこの  
 生れり  
 侍をかひゆる  
 茶飲てあはれ  
 女と孫とせは  
 小所紅松金佐の匂いとゆるゆる  
 つんでさう  
 かゆい  
 髪はほくそこの  
 旅のつれ

香丸画





榎朝卿富士川  
 出陣の時源九郎  
 義経陸奥秀衡が  
 館原をのひかき  
 ひま川川の宿と  
 足利討死し  
 平治の乱  
 終久くたえり  
 の親とや喜ば  
 一申さん詩ふ  
 棠棟の美那  
 と〜〜〜舞々  
 な〜〜〜んれと  
 燕さるまふ  
 依さるまふ  
 依さるまふ



いゝあゝ

東漢







辞世 鶴の林のうらやまをさるる身もさるる

自画賛 我れ形も世のまもるぬ病のうらやま

世みゆりてさるる身もさるる

宗徳法師の死の報に姓の三喜成の飯尾子て洛陽にありて位は僧正の位にありて

頼朝義経初対顔地 頼朝の東長村八幡宮の社地は治承四年壬寅

東鑑云 治承四年十月廿一日武衛頼朝令遷宿黃瀬

川給中署今日由實平宗遠義實等性之不能執  
啓鎌倉殿之處武衛自令聞此事給思平請彼人程  
奥州九郎之早可御對面者仍實平請彼人程  
之義經此也即有進御前互談往事催懷舊  
持逢父喪之後依繼父治二年正月長成之扶

千貫極 三徳の駒のあふり伊豆の水は流河よりて取置の料よりて其川の上は越えて東

多幸也 而加首服侍武衛被逐宿望之由欲進  
失情之強抑留之間密信出彼館首途秀衡  
所育て流自在ありて山里を何國ふもありて中は  
所育て流自在ありて山里を何國ふもありて中は

駿豆兩國 則は名貴極の川は流

三鳥 箱根取まて三里は八町は國都會の地して人多く賑ひ客のあり

伊豆三嶋神社 三名神大月次祈音

後三嶋の神乃をさるる身もさるる

祭神大山社 相殿四坐神社云云天正五年三嶋明神出現  
日林紀曰伊井諸尊技斬軻遇空智為三段其一  
段是為雷神一段是為大山社神一段是為高麗



神代卷鈔云伊豆國賀茂郡三鴫神社攝津國鴫下郡三鴫  
鴨神社伊豫州越智郡大山積神社此三所俱一神也

未社

見目祠 樓門の外。八幡宮 同前。巖鴫祠 二王門の外あり

東五社 船寄社。飯神祠。酒神祠。茅二祠。小楠祠  
俱本社の後東側あり

西五社 幸神祠。茅三祠。聖神祠。天満宮。大楠祠  
俱本社の後西側あり

別宮八社 二宮 三宮 四宮 五宮 六宮 七宮 八宮  
俱本社の後西側あり

田川祠 二宮 三宮 四宮 五宮 六宮 七宮 八宮  
俱本社の後西側あり

祇園祠 神領内祇園あり。社頭あり。豊磐間  
社あり。豊磐間社あり

舞臺 社あり。隨身門 社あり。豊磐間社あり  
社あり。豊磐間社あり

鳥居 一所の樓門の外あり。二王門 樓門の外あり  
三層塔 二王門の外あり

神池 二王門の外あり。鳥部屋 塔の側あり  
神馬廐 樓門の外あり。薬師堂 本社の後

寶藏 神供所 俱本社の後あり。馬場 本社の後あり  
祭 七十五名の内大系正月元日四月十日八月十月  
十一月中西日神官夫田部氏社家三十六人

東鑑云 治承四年十月廿一日 賴朝 兼 燭之程 令 詣 三

信 仰 之 餘 點 當 殿 奉 寄 神 領 給 則 按 實 前 令

書 伊 豆 國 進 狀 給 其 詞 云 長 寄 所 寄 進 如 件

右 件 早 奉 進 敷 地 三 萬 大 明 神 所 寄 進 如 件

先行紀行 治承四年十月廿一日 前右兵衛佐源賴朝朝臣

伊豆乃國府よりわかれ三鴫乃社を参りて

松のほとりこころくふやけれて庭のうらむ神さびりり乃庭

しらの伴との國三島乃大明神とていりきりし神國

入道伊豫守實綱が命よりて参りて参りて参りて参りて

天下り雨暴ふりてかきしる稲葉も忽ふりりりりりり

く此御前よりかればかきしる稲葉も忽ふりりりりりり

せ實乃り苗代乃のりりりりりりりりりりりりりりりり

母小伊豆の國府のれ名鈔小田方郡とあり三鴫神社延喜式小賀茂郡甲

六座の内大社とあり又鳥丸冠廣御東行の晴露雨しては野小別り

水して稻根へせる色さやうもあけく

あふ澤るしては社小別りたまき

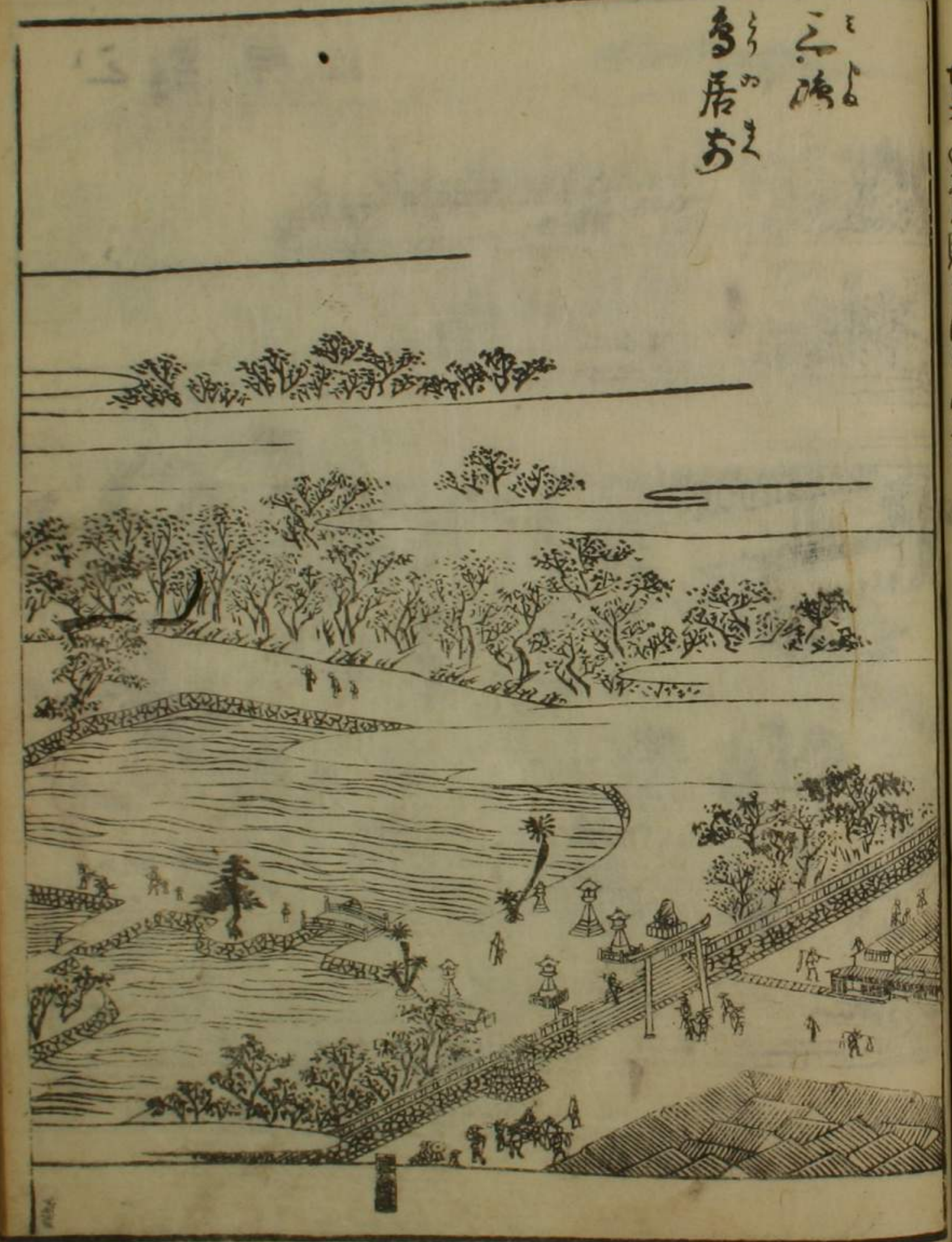


天の川井園のあなせれとらよ今も三嶋の神なりは神 光廣

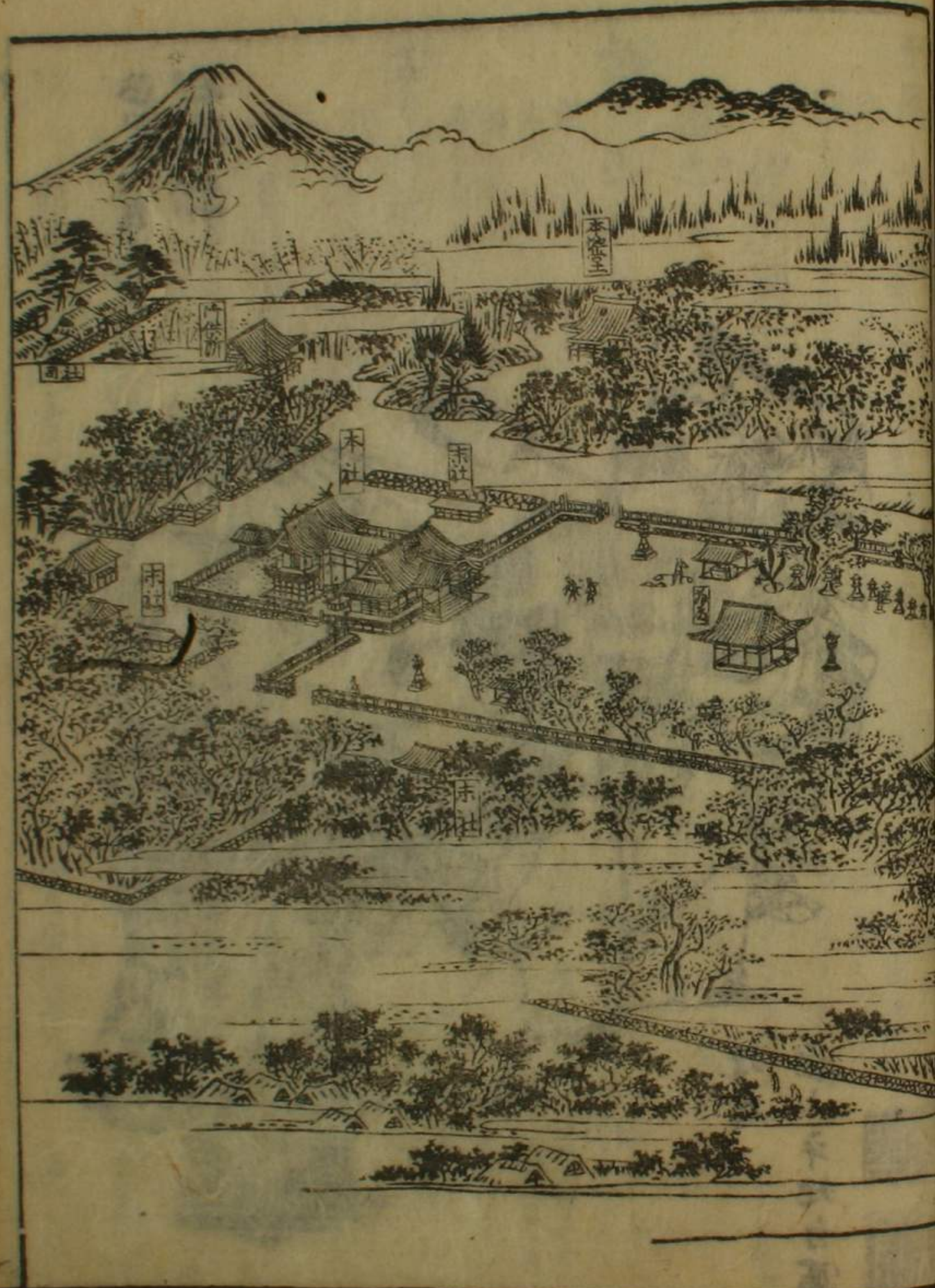
雨止んで晴天とやうなりてたらしめ

ま當社と攝州豫州三所共小三嶋と称して大山祇命派系なり  
流りて三嶋大山祇富士と本花園耶姫と御親子の神と且初雨の  
神と神道と三嶋龍雷傳とて神祕ありとるされんせ侍傳と  
能因法師の伝わりてて光廣止雨の和奇伝なる治承の辰り  
三代の將軍九代の執權共恭禮厚くして田園は寄附せし官柱  
壯麗なりと頭魏々たりは神の使令とて神代に鴛鴦鷗水小戯れ神  
籬と鴛鴦鷗の驛の小川に鯉多く生じて瓜柏をわたりて  
いり下り曆は製して社家よりおられと三嶋曆より神風や豊々との  
あふあふなきの響の若くは親々たるねの響たふ交り疼の聲の虫の若く通し  
初てあふ湊座一ゆより千有條派なれと神使日々小初りて  
ゆきの貴賊まのく小詣とる代久くも派初らるる初と貴

三嶋  
多居あ







二之岩神社





正月六日  
三修系



陸山平起白馬

走陽山

八百部走陽山小齋あり幸東鑑ふりり本社壯麗なる所なり  
伊豆の國山の南小川の陽のそとに神の宮あり

龍之湯

熱海温泉

諸人入湯は平右衛門法齊湯や中陽凡湯川有湯 陸の湯宮の名あり  
土入湯の各所あり

吉々牛杜

思ひ及らざる井の杜乃東ふるとをける人の袖もぬれたり

貞拾

五月間と井の杜の時人志しき事こそ鳴渡るる那

郭とさるる小室聲なきよ赤人の袖もぬれたり

大蔵三位

長原寺房

元輔

左馬頭

藤巻重臣



興小島 伊豆の海度

箱根津波我越えり川の海の中の小島は波の舟見たり

富士見山 三塔より海道筋東武里寺あり三塔より舟井坂ふくろ船産と

本の上法華坊より上七面祠法華題目堂あり天時雨坂小崎坂はさて二ツ  
谷村下長坂毎原村小宗岡寺と云梵刹ありさうふ一軒伊豆守の家あり  
龍山は豆筋並山下田への道道と云れとて富士見の山ふ

山中城 見平の東山中村あり小田原小原の時ふ城と築は小原を借門  
右土氏勝回宮豊守あり命とてふ守とてふ守とてふ守とてふ守とてふ守と

小原征伐 時園白秀次中村一氏官城を以てされと取一氏を麾下に置  
重綱先登して勇威と捲い味方の一軒伊豆守討死は小田原方と回文と  
物と大勢討死して氏勝殿在り遠ふ

豆相兩國塚 山中村はさて小松本大松本石蔵坂より豆州並山の  
塚見り甲石坂小甲石二ツうらまはさて國塚あり

風越基 國塚のわりの名を左右本差坂多しと云れり箱根駅まで十八町之  
名の入は瓜芦川町より入るふ駒取持現祠あり也しては山麓の左右

箱根津波 箱根津波とて自地と築せりられと別て京坂へせり煙臺の罹  
箱根津とて名をせり

山形津波何やとわうとあみれ草

箱根

關在境所露出也云云又庚申堂鐘堂あり南坂の旅舎つとよ  
駒ヶ嶽東北に二子山南に日金山伊豆の海緯ふ見ゆ

足柄の沖坂つとよ玉匣箱根の山乃おきん何と云ふ

十月はより小東の方小はよりるに管根とつとよはれん越る所のあり  
さゆわくくよの帯小わくくろく遠小津小せりては海とつとよ谷小

くろくさばたむはるは小原本の葉ははくわけてまこれの林霧のうらみは  
後の空雲をこしは成然のんをこれの油のとりとと

客路 過箱根山 垂矢 旬千山 猶是 極行人  
單衫 雲濕 晴疑 雨老 樹花 閑夏 似春  
仙鯉 潭清 無網 罟午 雞村 遠有 朱陳  
萍蹤 未識 何時 定仰 望煙 賈愧 隱淪

六如菴

やうそふもあうは関津のなくさく  
耳酒とそくは仙島や壺とみれ

斑竹

鳥島





箱根湖  
水

西河原  
世藏堂



箱根  
驛

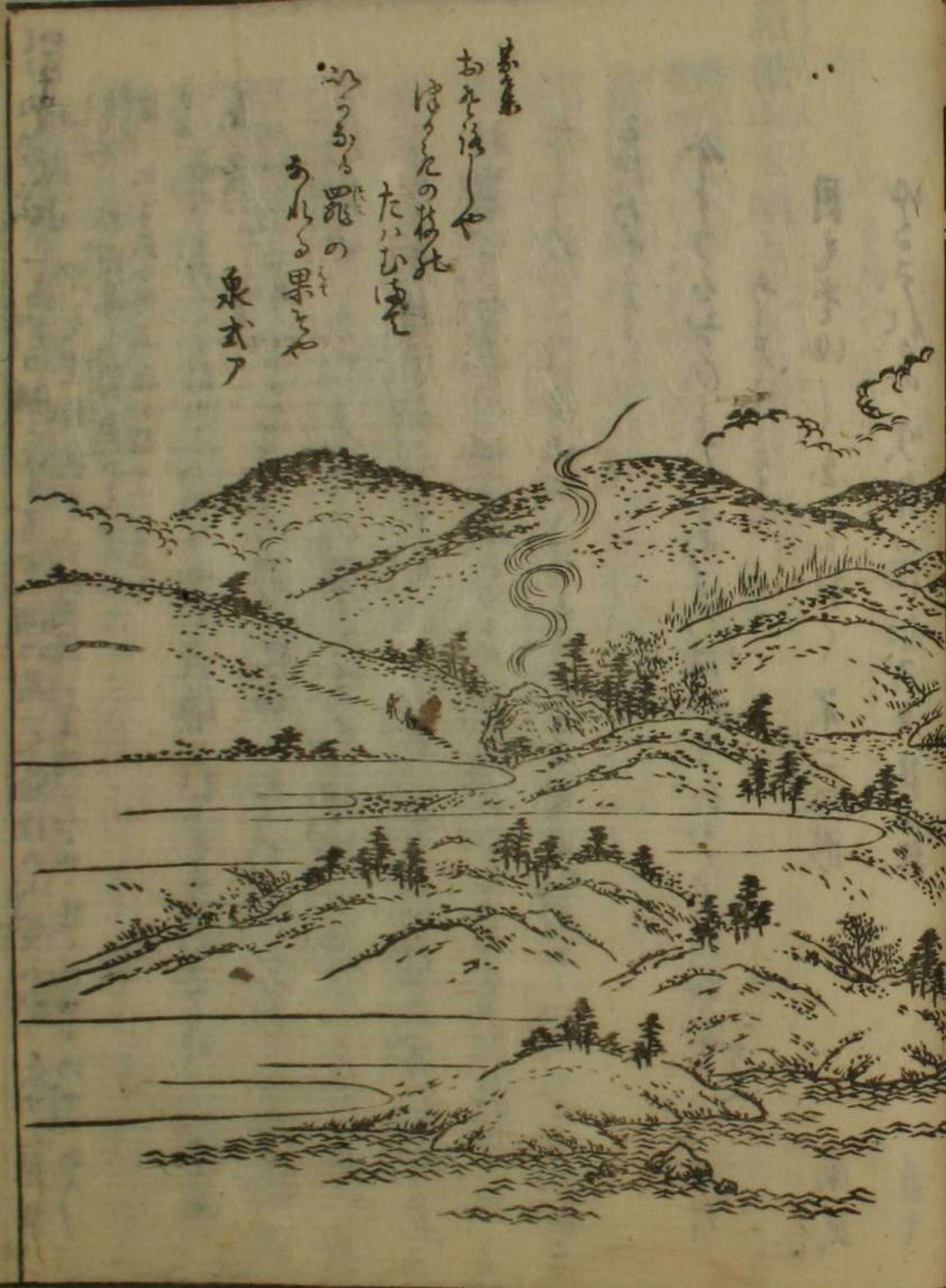


箱根  
権現社



水湖





東武  
あまのほしや  
はくろくのほし  
たひむら  
あまのほしの  
あまのほし  
東武ア

小  
地  
獄



小地獄











東鑑

奉寄 相模 菅根 權現 街 神領 事

右件 為 菅根 別當 沙汰 早可 被知行 也  
寄進 也 全御 庄者 當 兵衛 佐 源 賴朝 為 沙汰 所  
書 以 承 四年 十月 十六 日 其 妨 仍 為 後 日 沙汰 文

同書 日 治 承 四年 十月 十六 日

安貞 二年 十月 菅根 山 神社 檀佛 閣 燒 亡 當社  
垂 跡 滿 月 上 人 草 創 以 後 五 百 餘 歲 未 有 回 祿  
被 例 北 條 武 藏 守 泰 時 頓 息 潛 有 解 謝 之 義

社 考 日 根 者 本 社 彦 火 出 見 尊 也 又 有 駒 形  
伊 豆 箱 根 和 龍 王 右 謁 王 左 謁 王 及 容 人 宮 職 又  
有 役 行 者 吉 備 大 臣 弘 法 慈 覺 等 遺 跡

箱根温泉

七箇所あり七湯巡り箱根権現坂

生死池

六町あり。頼朝卿状書石

薺の池

此池の傍に法蔵比丘尼の元西河原石地蔵

曾我兄弟石塔。虎御前石塔。庚申塚

芦之湯

七湯の其一箇。権現坂より一里

小地獄

此湯の傍に八町あり。小地獄

氣賀湯

此湯の傍に一里あり。氣賀湯

底倉湯

此湯の傍に半里あり。底倉湯

官下湯

此湯の傍に一町あり。官下湯

堂嶋湯

此湯の傍に五町あり。堂嶋湯

塔之澤湯

此湯の傍に一里あり。塔之澤湯

堂嶋湯

此湯の傍に五町あり。堂嶋湯

塔之澤湯

此湯の傍に一里あり。塔之澤湯











宮根七風名の中  
 塔根珠小水の  
 更系之風流あり  
 房とあり心内湯  
 そく温氣を算ふ  
 一肩膝腰  
 を病む所と  
 湯槽小浴して  
 湯衣浴くゆ  
 湯と半氣の水  
 其向々を赤井の  
 楊弓軍書漢の  
 摩興の  
 位興の  
 新對の



一ツ

鬼のい  
 地獄  
 箱根の  
 湯  
 極楽  
 あり













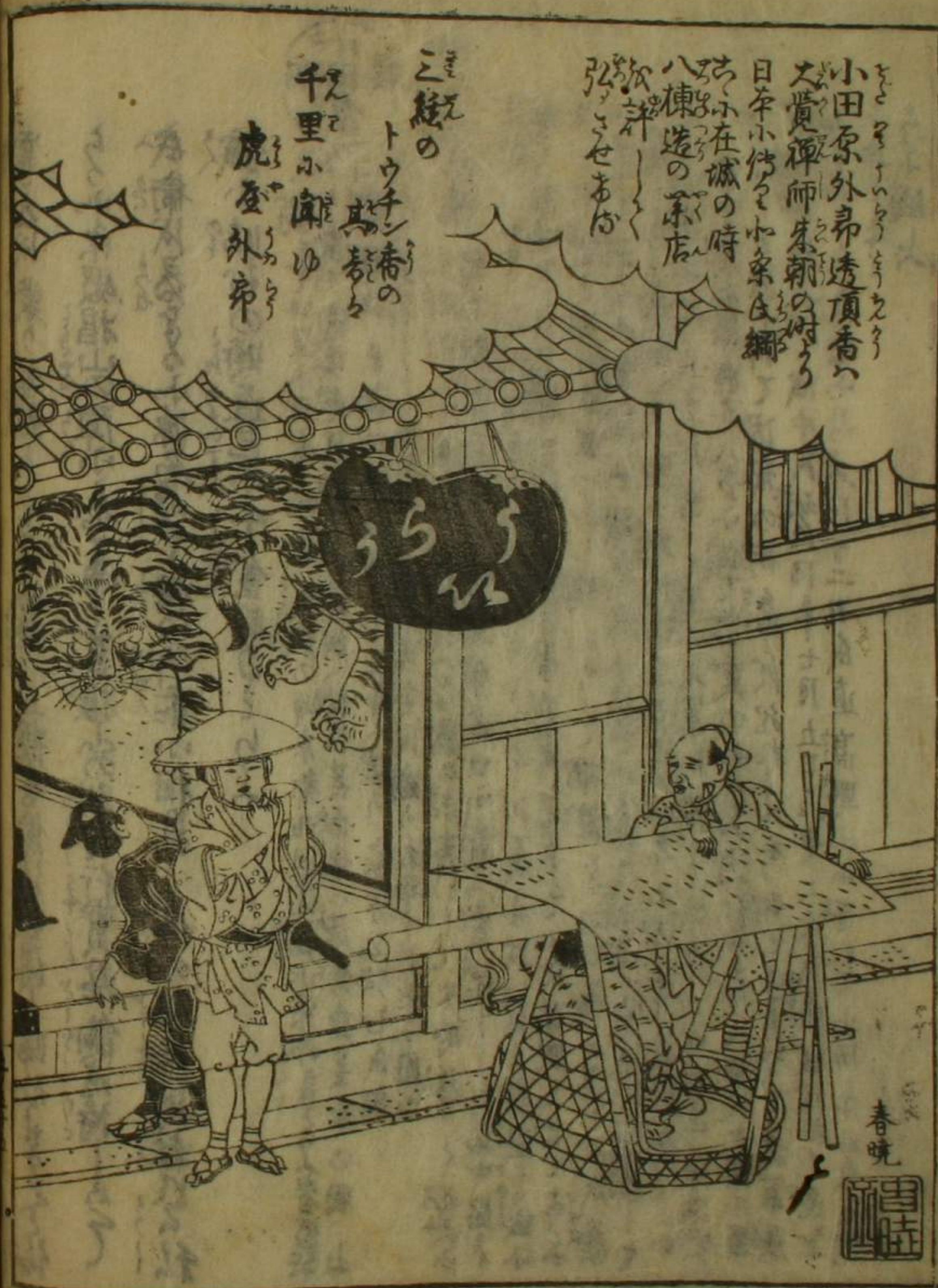
間小加美次景廉大見事次實政武衛の御後小生々景親汝汝々  
北條内政の君臣を以てんとて數町の險阻に在りて處頼朝の節度の  
中小退け實事時政等其傍小使を以て收め人實事云々各無る乃  
頼朝を以て喜びのりしとて人敢て率せしめり以て示し置る事  
叶ひ難し御一身小放て縦旬月汝汝中と實事計畧汝汝加置  
まるとして北条四郎の箱根湯坂と唐く甲州小赴ん人北条三郎の  
土肥より系原小攻り大庭景親を武衛の跡と逐やく云々以て捜求する事  
多し時小梶原平三景時より人者ありて慥小御在所汝汝といふ有  
情の慮は存し人年小八人跡跡よりして景親を汝汝曳傍の孝小禁宅  
に引回小武衛御影等の觀者汝汝出とて嚴窟小安し人實  
事其意は回する作小云首は景親等小修するの日の本尊は人北條の  
大將軍の初小汝汝汝のより人定て説と略と下件汝汝汝三歳のより  
乳母汝汝小春菴也人嬰便の將是汝汝汝事懇篤よりして王國日以唐て  
靈と汝汝蒙り忽然とて二寸の鏡の正觀を汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝

相  
小田原

小田原北條

大磯より四里小田原北條氏綱の時京都西院院錦小治外良と人者は景  
下り家が遠祖都賀頼朝とて氏綱に敵其由緒は深倉建長寺の阿山  
大覺禪師末朝の時供奉して日本に渡り家方と引ひ氏綱  
されと靈事とて小田原小八景の居宅に賜り名物とて世に傳ひ  
小田原北條 相記云小系新九郎長兵衛盛の結縁なれど時移つて西武小  
系都小なり是利將軍頼朝の仕とて今川義忠汝汝の高田寺藏小  
居一忠功とてげし慶應相小汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝  
小至つて阿左の頼朝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝  
系々汝汝小汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝  
本陣と定め軍將を八方小汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝  
石燈の門に汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝  
九拾七年  
ら小藏人





小田原外希透頂香の  
 大賞禪師朱朝の付  
 日本小徳と小糸氏編  
 八棟造の茶店  
 敬許  
 弘くせあは  
 三越の  
 トウチン香の  
 其器々  
 千里小廊ゆ  
 虎登外希

春曉



酒匂川

小田原の北あり酒匂川相模川の源なり又一名榊川云小田原と酒匂の中小山三原とあり皇月御井上宮あり三浦景次郎の霊は多と云

盛衰記云

治承四年八月廿五日和田小左郎義盛三百餘騎七鎌倉より箱村

腰城八松原大磯小磯と打てて百路は一日小酒匂の宿小着と云

同記云

相模國園子川と歩つて時梶原が鎌倉より水とありと磯ひ奉り

一時暇をとりて小梶原よりあり

はらふ川をいづれば後をめぐりて申せし事記せり

小餘綾磯

酒匂より大磯までの磯也凡て磯より下が磯也磯大磯小磯乃

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

同記云

此の磯の磯を形して磯兼花ありぬと申せし事

曾我里

酒匂川の末小八幡より廿町許入る曾我里

川向神社

酒匂川の中ふりて有我中村とあり

藤巻寺

酒匂川あり梅澤山東光寺と号し真言宗之堂あり本

鹿

酒匂川あり

音妻山

御道のたの方武町小あり

相模國府蹟

今國府跡あり

日蔭馬場

今國府跡あり

小餘綾社

中島よりあり

切通地蔵

石佛地蔵あり

夫本

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

依内親王

住宣

主御内倉

小余氏康

右近

小貳命

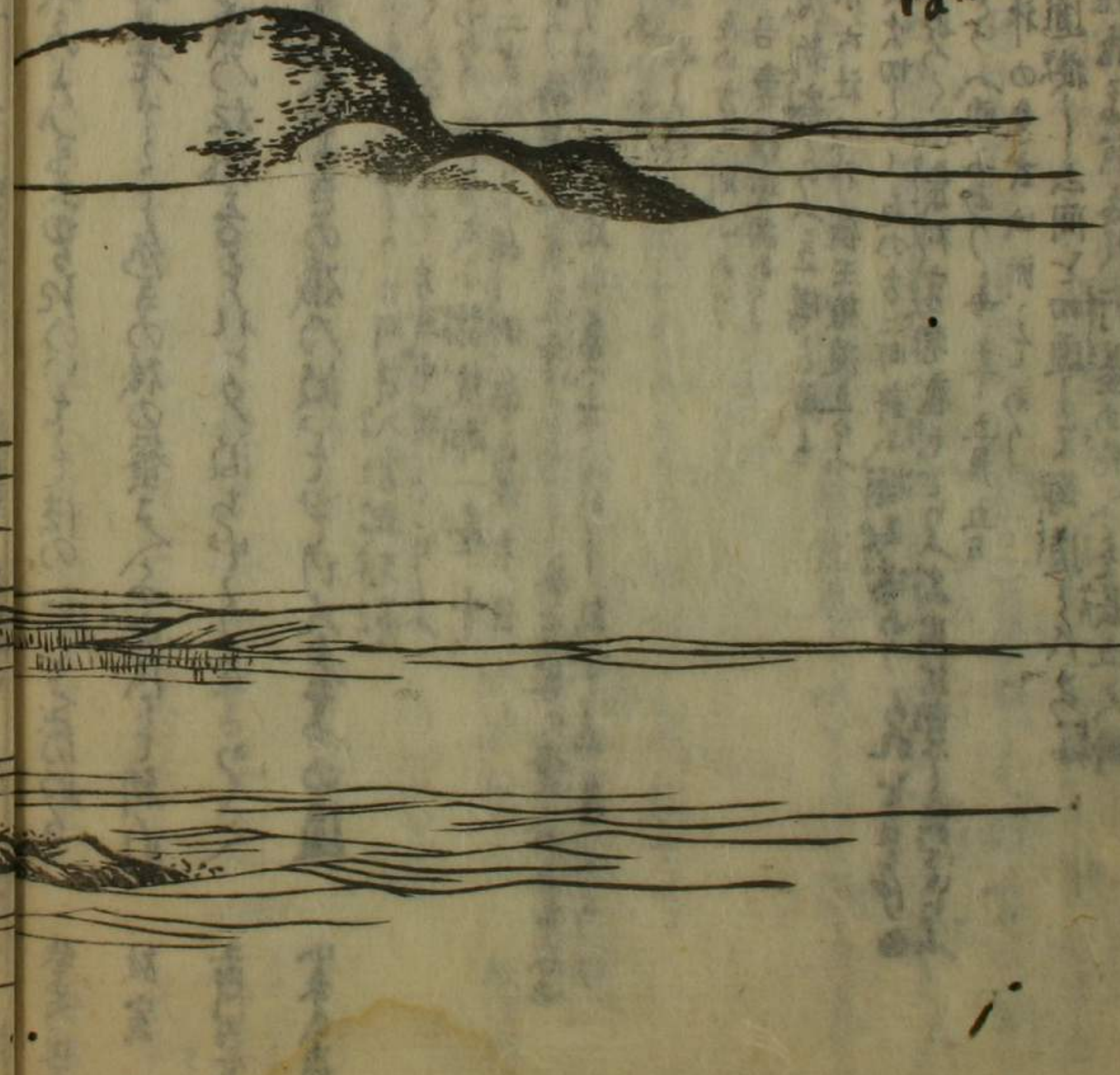
小貳命

小貳命

般行朝臣



秋暮鴨立澤



大澤秋煙夕景涼  
空方澄寂飛空鶴  
在羽著出差宿  
勢死津

与川至古圖圖

山僧倚杖地波澤  
水如烟鷗起秋  
天晚悲風至渺然

烟惟枕



石田文汀画











相模 大儀

相模にて北七町は破垣より、北七町石を築き小出とてこれと置て人家を...

三社推現

高麗斎村あり、宮内省は鶴足山高麗斎寺とて、...

祭神忍穂耳尊

仁徳帝の御宇小碓朝まじりて、神功皇后三韓退治の時高麗斎を神威と...

花水橋

高麗斎寺村小あり、此より、...

驛馬進路

行路野牛、浮鼻入前、橋、...

八幡宮

八幡宮、村あり、別當は、...

馬入川

馬入川、村あり、相模川とて、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...

相模

相模、古くは、...



てあれせとて件の人と教され船田郎等三騎馬より飛て下り透回れり  
 生捕りて俄の幸小張輿也も幾馬小乗せ舟の繩もてもかふれは  
 誠り中間人小馬の口引せ白晝小瀬倉入りたる是は聞人毎小袖と  
 後下ぬりりたる人未幼稚の身形れ何程の事有るれども朝敵の言  
 引多れし小非とて則聖日の曉階小首はれ別も昔程嬰を我は放  
 して幼稚の主命小換後護る貌と家下舊君の恩は報せ其までを  
 さら五丈原の程希有也不道とて人多小丸彈とて惡く義貞  
 實りといひわれも誅とて内々其義定とて宗景傳聞てあかき  
 小僧れたるも未惡の罪身と責るるも三界廣といへも一身は措小  
 處形か舊多やいとも一飯と與る人無くして逐小を食のそ  
 心成果て道路の涯りて飢死したるを聞し  
 十間坂 馬への東を里計小ありは所たの富士大と箱根右ふは源倉六浦金及  
 源倉河渡向は所とて十七の夜野ひ三百騎小越れ源倉の  
 大御堂とて村死したる幸あれもを事記し見くしん

大出寺  
 一鳥居









雨降山山寺

前不動堂

相州大田郡山之嶺あり其前宗徳庵道列者八丈度其外  
坊舎十八度附陣百五十餘宇又義毛村小十五宇其庵  
上方京師より糸海なる圃小田原より左一曲とて山麓  
六里半にはり清らなる谷の西の山石曲りて山麓  
子新村まで五里をちつ小一里居り不動堂まで八町坂路の右側氏家軒  
落つてして所師の家旅舎茶店ありと名木の茂る所ありて  
公院として萬一石の縁ありて不動堂より本堂行て  
十八町男坂女坂の二箇の海路ありて石多多くて堂難

奥不動堂

本堂より北を尊人聖不動明王の  
僧正良禪の作産像長五尺八寸南面

行者堂

行者堂の西ありて鎮守本堂の西ありて天照大神  
な曇天春日石尊不動堂の北あり

白山祠

本堂より西ありて神輿舎行者堂の  
上方あり

鐘樓

海の邊ありて文とされと墨呂沼の末小寛永十八年辛巳十二月廿日  
大獲那從一位左大臣原朝臣家光とて築ら

山門

本堂の南ありて二王門の低小経蔵二王門の傍

二重龍

本堂より西ありて二河ありて  
傍小静龍権現祠あり

良辨龍

坂路の西ありて新龍坂路海永町ありて傍小  
雲岩権現祠あり

大飛泉

一の鳥居より上方  
霞河系あり

石尊人権現社

本堂より東ありて坂路八町ありて女人御界之御説  
常小諸人のまほは勢り毎歲六月廿七日より七月十七日

祭神

神跡小幡石尊の傍ありて傳ひて本武尊東夷征伐の御時以  
聖人相州小寺年経回の附ありて小幡石尊の傍ありて石面小幡  
飛導光如素の十字に渡りて一々を御魂を第八代蓮如上人  
説きひて一徳又當小幡未すありて

末社

徳一権現祠相州河内大天狗  
小天狗河内石尊宮の傍あり

本當

本當鎮大寺の因基良辨僧正は信正の傳叙書小幡ありて俗性之近  
は國志賀郡の人とあり當山の説  
と異て大和名所圖書小幡人の俗性相換國深倉際屋を即時忠の子  
は傳記大畧出せり

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺

時忠

聖武帝の御宇神龜年中關八州總退補使として東夷は本  
治其祖先大威冠源子大佐の玄孫なり深倉小在住一家富榮て  
一門斬とほして盛んされし齡四十小なるまでいも家と鑑言ありて時  
時忠妻小若つて我が家倍繁榮たりといふもいも家督とていこ  
も持人は是才一の慈く八且女身の身して子孫なり石尊を罪業除  
諸善昇院の功德何と小跡ありて特観せざる勝れありりれ共小寺



あれは念一子に儲けし其より晋門品は晝夜讀誦する事奉り  
感夜の愛小齡八旬小文々老僧香席の袈裟小水晶の珠散ははま  
右のふ小鳩の杖たのふ小一巻の經は持し枕上小まほひは任は法華經  
二十五品をこれに准し三の普陀洛山の教主に経は夫婦の者小授を  
てむきまゆ小夫のまはは靈を以蒙り感涙して熱ひほどを任は妊身と  
成て月と果て一男子に備く夫婦の寵愛限りし出誕の後二月はうり小  
赤子に乳母小懐を母に固小出て赤子に捕れたる其時雲中より金色の蓮  
然として翔来りて赤子に抱きて虚空小遊びに鳴喚哉といて早雲小今一  
夫婦の式を天小作し地小倒れ悲歎慈傷腸は断はうくを任小一夫に喪る  
より家屋財寶益貯しそ其伶小捨て共小竹圍もめくおまろ我子小再ひ  
逢んそと你山の巖々たる小分入巖は松々一本實は根ごとく又荒磯の凜々  
不せう小計て浪の音小夜泣ぬ一幸凡と果て我をせせぬと四まの赤  
子のみ風狂のくまがし小呻めりたは奥の大隈川小あうてかくれん

やうらみおの西川と聞はれとわはれもり常とまゝ流のき

せれより東山道小かり信濃國より住馴し相州由井里を懐くまふりく  
住一家も今其形もめく壁落軒端ぬれ門も朽く扉も折れん小涙  
もとゆゑ又なつては都の方とまゝ流るゝあ海と凌り流るゝ果て  
ととらるゝを體の顛顛と表て見ゆ小かけも形も流るゝ奈と流るゝ流るゝ  
表の鶴業の雉子の啼も後の聲の断傷のほの耐の共小血涙とわは目  
の根をく本日の高のうた本幾度とそらうり免きのふとれ々々と早  
三千の年とそらひたるを老驥の千里ととつども疲れ飢鷹の一羽  
手ゆり其頃南都小義剛僧正と碩學宏徳の名僧ありしやねの事  
形も小當未導師弥勒菩薩未臨の体と夢見り其早且小春日野小跡り  
大明神小詣其ゆゑとたぬ楠の木の間小赤子の泣聲聞の怪しくまゝり  
見ゆの金色の鷲嬰兒と懐て鼻中小的り期て僧正持尊の不動さす  
猶もて一正の懐本ての嬰兒は懐て僧正小ま即家小より撫育し



中ノ禪名とは金鷲童子と云々號多期て年月と替はて小十九春小  
そ形あひたる聰明清徹の神童少して依小所人者於然った師の僧止ハ  
年齡八十と入寂の中金鷲奇童亦没哭其時坐福のる小  
はく執金剛神の像依つて御足小系依りて引動はやく禮拜  
舞小唱云聖朝安穩天下泰平具座併法利益衆生とぞ祈りたる信力  
通して忽御足より五色の光明放て官中派照りたる聖武天皇は以  
おとて勅使遣されのる元派見せし夕の金鷲行者の許ぞ  
尋令勅使回し曰い形や光明王官派照り金鷲若て佛法興隆の志  
願の勅使やい奏達のれ帝亦心金の鷲行者はわれ眼清  
恭信の志はうとてい其師派求し行者は是より我戒時とて宣  
旨のる金の鷲禪羅維髪して良辨を申る其より帝の御歸依派  
お成りて遂小春日野小東大寺は達れられ大佛殿と稱り即良辨  
別當職派蒙りし是華嚴宗の監觸へを後小時忠妻婦はあ海遊え  
坐して城國定のた派小着て歩守派頼便派をい即那とあ  
る國とる里の人も乗合され思ひく小云る中小當時奈良の都  
聖武帝の尚戒師東大寺の別當僧正良辨と申く其勿り對誓の巢  
より卸したる人とも承る今帝の御返依る其聞へも例をり侍り  
とて語る時忠妻婦これと聞りも胸躍れ息ぎ配り下り念良の  
都と云る其地は寺社と巡礼備小我子小遠せり初令たり派二人を  
あふも其の清なる身病れく東大寺の南大門の傍小三本の林と  
云せ東薦は纏て悩煩ひる其頃僧正良辨奉内のるこ老妻塚の方より  
光出良かの車派照りたる僧正怪と問せよ我と相模國の者こ  
驚小狐れ餘派申このすく三千年其の清と云ふゆひのりて車  
其誕生の年月いたは夫婦答て其嬰兒の守袋中記せるや度雲二年  
巳巳四月十五日僧正のれ派聞てぬる我父母於る且歡び且と歎て人  
共小御車小乗て御鎌合伴ひの其以責職を傳聞て油と絞る



之形より多し帝ありは聞る感涙と催し剛詔有て奉領安堵の官  
 符は賜てくれ相州由井里小むり小まの館は造りて遠近の親族  
 聚りてこころの春小過ありしをいせ贈りて見小なる良弁僧正也  
 故郷形は相州小赴さゆい由井よりあるの方小當て高山あり其山  
 嶺より靈光赫々たり即僧正也ゆい土民と聚て大本は伐し山  
 以穿て高き小至り光の元小至りや金色の石像の不動尊出現は  
 僧正のれは新念し石尊と作に社と建て奉り又柳本派を創り一軒の  
 尊容は依り今の奉堂與不動明王のけは山峯高くして清泉あり  
 一の流と下りて新里より嵐頭より一の流の飛泉階々下りて居りたり  
 今の二重の籠あり即青龍推現と祀て祠と傍小建中當山開闢の靈  
 應は帝の奉り奉りて敷感斜めは終房相三函の中より守を以  
 若干宛りひめて其倫旨は賜り其より伽藍壯麗なりて甲九段の坊  
 舎小香煙の白ひ芽々たり蓋承天下の祈禱とて僧正明王の尊前小三七

日六波羅密は依り夕と満願の日明王一偈は示して曰

常來尊帥慈氏尊 法華尔生名良辨  
 我山建立作佛事 未法衆生施安樂  
 此地清淨為結界 迷多衆生不來住  
 東南西限十八町 我形像作為本尊  
 是山五佛表形像 五大明王當守護  
 一度奈詣得壽福 家内安穩無諸病

當山金堂の乾の谷小なる池ありは池にて良辨七日加持のい池中より  
 大蛇現りてこれいふに守護者へ年々く荒神と成て五箇の塵小文  
 里法性の賤は見えたるの蛇身と成る今僧正の法施小よりて都奉内院小生  
 りは後當山跡は垂て永守護神と成て法と魔障をる者ば事あり  
 云々後て見え人々意なり 抑はふと相州才の高嶺より一た小雨氣  
 絶は故小雨降と山勢とせり山麓より頂嶺まで巉々として雲霧の氣と  
 双く展々として左右小民家相連り其中小當山の御師の家を多し諸國小  
 檀那と持て奉り神札と配りて奉り修験者の一團の山奥の石尊  
 神を及徑崔嵬とて雲小連り霞小封り毎歲六月廿七日より七月十七日



以限て路々用を江府の諸人稱麻のやく近國近郷の登山竹草小何より  
 旅舎を所せりまどまふ合山野の茶店其地の産物とありあふ田原の  
 方よりの諸人を飯住の饅首小ふりて坂東五番の札所と拜り兼毛より  
 せりては日堂兼毛不動は拜り明王いじり應神帝の御宇初は漢土  
 より渡らせり小より日本軍初は靈尊と崇む原大山の夕々を神并  
 大山祇命は山の名小何とて京師の愛宕山和州の金堂山小也  
 此て絶峯と乾坤と雜と天地の外小出らぬ真小捨芥抄下見  
 なる七高山の外小して八極は觀靈嶽貯る下

藤屋時忠は近州志賀といひ又相州由井里といひ本予一熟あり時忠は藤原氏  
 ありて後海云の後裔に因て近江小領地あり又相州に任國あり住居せり  
 故小遊州といひ相州と  
 けりといひ旨遊なりと

東海道名所圖會卷之五 畢



